

シューベルトのピアノ作品

4つの即興曲 D899

それぞれ 4 曲からなる 2 つの即興曲集(D899 と D935)は、シューベルトの死の前年、1827 年の作。D899 は最初の 2 曲が、1827 年 12 月にハスリンガーによって出版された(残り 2 曲の出版は 1857 年)。「即興曲」という名称はハスリンガーの命名だが、シューベルトも気に入っていたという。ハ短調の第 1 曲は、どこかもの悲しさを感じさせる冒頭の素朴な主題が、様々な味付けで自由に変奏される。変ホ長調の第 2 曲は、本曲集のなかでも有名なもので、3 連符の軽やかな無窮動。中間部では舞曲風の旋律が現れる。変ト長調の第 3 曲は三部形式。内声のアルペジオにのせて、心に染みわたる旋律が歌われる。変イ長調の第 4 曲は中間部にトリオを持つ三部形式。即興曲らしく訥々と進む主題が繰り返され、トリオでは暗い情熱が顔を覗かせる。

ピアノ・ソナタ 第 21 番

1828 年 9 月シューベルトの死のわずか 2 カ月前に作曲された、生涯最後のピアノ・ソナタ。第 1 楽章モルト・モデラートは、優しく親しみやすい第 1 主題で歩み出し、くぐもるようなトリルの後、変ト長調の印象的なテーマが浮かび上がってくる。続いて穏やかな第 2 主題が始まり、自由な転調を経てヘ長調のコデッタ(小結尾)に至るが、牧歌的な平穏を断ち切るように低音のトリルが現れ、提示部が静かな力強さで反復される。展開部は嬰ハ短調で開始され、複雑な転調をともなって現れる様々な音型が陰影に満ちた幻想的な世界を形づくる。第 2 楽章アンダンテ・ソステヌートは、穏やかな抒情に彩られており、中間部では明るく暖かな響きを聴くことができる。第 3 楽章スケルツォは、快活なテンポで優美な主題を奏でながら、トリオでは一転して変ロ短調に転じる。第 4 楽章アレグロ・マ・ノン・トロポは、提示部を繰り返さないソナタ形式で、冒頭および随所で強奏される G 音が耳に残る。途中、少々性急なテンポを保って複雑な転調を重ねながら、最後はプレストで短く締めくくる。長きにわたる模索を経てシューベルト固有の様式というべきものが結晶化した本作は、彼の全ピアノ・ソナタにおける最高傑作と言えよう。